
虹色の架け橋

リュ亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の架け橋

【Nコード】

N0543M

【作者名】

リュ亜

【あらすじ】

俺は菊文字赤音。俺が不良に絡まれてる美少女を助けた(?)

そして次の日何とそいつが俺の学校に転校してきて!?

(この作品はライトノベルを意識して書いた作品です。男性向きになっています)

一話：出会いと美少女

『好きだよのこの一言が言えなくて』

誰かがこの言葉を言ったが分からないが、

この言葉は、俺の心の中にずっと残っている。

少し前までこの俳句を忘れていたがなんかの拍子に思い出した。

確かにその通りかも知れないな。

俺も小学校の時に好きな人がいたが『好き』という言葉という事が出来なかった。

……あの時の俺も恋とやらに臆病だったんだな。

そして今の俺はと言うといつもとんや変わりがない帰路の道を歩いている。

すると漫画とかで出たような明らかにやばそうな三人が一人のか弱い女性をいじめているようだった。

俺は来ていた道を引き返し違う道から帰ろうとしたのだが、どうやらその女性に見つかって

しまったようで、

「ね、ねえ！ か弱い女が絡まれてるんだから助けろよ！」

明らかに命令口調の言葉が俺の耳に飛んできた。

そんな元気があるならその元気を不良共にぶつけて欲しいものだね。

「ああ？ 兄ちゃんよー 俺達にたてつこうってか？」

明らかに威圧的な目で俺を睨んでくる。

「あのお俺は、善良な一般市民なんで……」

「じゃあ大人しく俺達にやられてろ！」

三人の中の一人が俺に向かって殴りかかってきた。……たく俺がなんでこんな目に……

俺はそのパンチを華麗に避けられるほど強くも無いので当たってしまった。

いってー……殴られたの久しぶりだな。

その後も俺は反抗できずに殴られ続けた。そして俺を殴る事に飽きたのか

「姉ちゃんよー仕方ないからこの男に免じて許してやるぜ」
そういつてそいつ等は笑うとどこかへ行ってしまったのだった。
やっと思ったか。俺は、真珠のように目がパッチリとしていて
ショートヘアの黄色の髪そして俺より二頭身位小さい身長。
世間的に言われている美少女に俺は話しかけて見る事にした。

「でお前は怪我は無いかな？」

「……あんた弱いわね。普通あそこは軽く蹴散らすでしょ？」

お前を守った俺にお礼の言葉も無いのか。巻き込んだのはお前だろ。

「はいはい。すいません俺は弱いんですよ」

「……名前は？」

「ハ？」

「名前って聞いてるのよ！」

下手に出る事を知らない奴だな。世間的にこいつは生きていけるのか心配になるよ。

「俺は菊文字赤音だ」
きくもんじあかね

「ふーん女みたいな名前ね」

「人の名前を悪く言うな」

「たたくこいつは人を悪くいう事しかないのかよ……」

「——お前の名前は何て言うんだよ？」

「その前にあなたその制服からして『西崎高校』の生徒？」

彼女は俺の制服を指差した。

「……ああそうだが」

「じゃあ今は名前を教えなくて大丈夫」

「どういう意味だ？」

「まあそのうち分かることだって……あつ私はあなたみたいにこんな所で時間を潰している

暇は無いの」

「ちよっと待て！ 教え……行っちゃったか」

本当に何なんだ？ あいつ？
ただ俺が一つ分かった事は、あいつが性格がねじれまくっているという事だけだ。

俺は、男達に殴られた体中が、痛いながらもそこを後にした。



家に帰ってきた俺を待ち受けていたのは、散々荒らされた玄関だった。

いや玄関だけでは無く家中至るところがものだらけだった。

「な、何だこれ？」

この惨状を言葉にするならば空き巣に入られた後と言ってもいいだろう。

そこに倒れていたのは我が妹だった。

「ど、どうした妹よ？ こ、これは一体？」

俺は妹にこの有様を尋ねて見る事にした。

「あっお兄ちゃん……無くなっちゃったんだよ！」

妹が泣きそうになりながら俺にしがみ付いてくる。しかし何が無くなったか分からない。

「なにが無いんだ？」

「坂下ナナちゃんのファンブックだよ」

妹が言っている坂下ナナのファンブックと言うのは今は芸能界で人気をはくしている美少女アイドルである。妹が言っている坂下ナナのファンブックと言うのは過激な水着写真が掲載されている所謂男向きな本である。

「それなら俺が捨てたぞ」

「え！？ お兄ちゃん何であの本捨てちゃったの？」

「……いやあれはファンブックと称しているだけでアダルトな部分満載な本だろ？」

お前に悪影響があるから俺が捨てた？」

「うわーん！ お兄ちゃんの馬鹿くおたんこなすくいけずく」
妹は悪口を俺に言っているようだが俺は何故だが悪い気分がしない。
俺ってもしかしてM？

「はいはい……馬鹿でも人間じゃなくてもいいから機嫌を直させて」
「うるさい！ お兄ちゃん何てだいきらいだー！」

それだけ言う和我が妹の菊文字冬音きくもんじふゆねは自分の部屋に籠ってしまった。
まあ……冬音のことだからお腹が空いたら出てくるだろ。

そう軽く考え自分の部屋に入ると俺は、ベッドへダイブした。

「今日も平和……だったな」

平和と呟く所で俺はあの生意気少女を思い出してしまった。



そして俺は、次の日の朝の教室の中は騒々しかった。

今日はなんかイベントでもあるのか？

俺は必死に頭をフル回転させてみるが答えは出そうにも無い。

そんな悪戦苦闘してた俺に気楽そうな表情を浮かべていると

「おおどうした菊文字！ そんな暗い顔をして！」

朝からテンション高いな。こいつは。

こいつは、菊池省吾きくちしょうご

俺の友達。こいつの事を一文に現すところだ。

『テンションが高くて頭の良くてリクласのリーダーで顔はイケメン』

これ以上も凄い所もあるのだがこれ以上言うと俺の眼から水が流れてしまうのでやめておこう。

「ああ省吾。にしてもこの教室の騒ぎ具合は何なんだ？」

「今日何と美少女の転校生が来るらしい」

「……聞いてもいいか？」

「何だ？」

「何で美少女だって決め付けて言えるんだ？」

「俺の情報網をなめてもらっては困るな〜菊文字〜」

どこから仕入れて来たがわからんが、これ以上聞くと闇の部分も聞いてしまいそうなので

やめておこう。するとこの教室の騒ぎ具合に風をきる様にこのクラスの担任の

山口先生が現れた。

「えー皆も分かっているとは思いますが今日転校生が来ることになった」

「いえー！」

「やったぜー！」

「ついに俺の学校生活にも変化が」

教室中の男子から歓声ともいえないわめき声とも言ってもいい声が教室中で沸き起こっている。

「じゃあ入ってきてくれ！」

山口先生に呼ばれて教室に入ってきた。

その彼女を見ての第一感想はこれだ。

まず昨日の意地悪少女を思い出す。

似てるな〜昨日の生意気少女に

「私の名前は、七海虹花ななみれんげです。皆さん仲良くしてくださいね！」

この声はやっぱり……

俺の生活を脅かす出来事の始まりだった。

二話：猫かぶりと誤解（前書き）

この作品は一話一話が短いです。

ご了承ください。

二話：猫かぶりと誤解

彼女が現れて教室中がパニックとなった（特に男子）

騒ぎ始める生徒。踊り狂う生徒。発狂する生徒。

おいおい……君達が騒ぐから山口教諭も困ってるじゃないですか。

ん？ 俺はどうなってるかって？

いやいや……まだあいつと決まった訳じゃ……他人の空似って言う可能性も……

「あつ昨日の菊文字君じゃないですか！」

彼女は指を指した。うん。俺じゃないよね。後ろに居る佐藤君の事を言っているに違いない。

菊文字なんていう苗字は俺は知らない！

「あ、あいつ……」

「裏切り者だな」

「二年一組憲法第十八条……裏切り者には死を」

怖いよー！ クラス中の男子から殺意と嫉妬の目がやばいよー！

「七海さん！ 質問があるんだけどさ……菊文字とはどういう関係？」

場違いな質問をしている奴……

そいつは俺の親友の省吾君だった！ そしてあろうことかそいつは、

「菊文字君とはね昨日私に絡んでた不良から助けてもらったの」

俺は行く気はさらさら無かったがこいつが無理矢理俺を……

「そして私にこう言ったの……」お前に惚れただから付き合つてと
そして私はOKしたの」

うんうん。俺はお前に熱い告はk……ってちょっとまてーい！

うん。誤解ですよ。男子の皆さん。だからそのライオンが獲物を見つけたときの眼をするのは

やめて。俺の胃が炎症を起こしそうなんですけど。

彼女がその言葉を発した瞬間。

俺への殺意がひしひしと伝わってくるのを感じた。

……闇討ちとか気をつけないとな。

三話：都合と彼氏

一体七海が俺に何の恨みがあるのか分からないが、見事に俺の学校生活そのもの

が壊れそうな発言をやってくれました！

そして今俺が何をしているかというと、

HRが終わり早速噂の立役者の七海を引きつれ屋上へと連れてくる事に成功した。

「うん。七海。俺が何で屋上につれて来たか分かるだろう？」

「まさか本当に告白？　あなたみたいな不細工犬と私が付き合う訳無いでしょ」

「話をずらすな。とにかくさっき言った事はとりやめろ」

「嫌。私ってさこんな可愛いからさ前の学校でも告白とかやばいの。

それでめんどくさいから赤音が彼氏という事にしとくよ……仕方ないからね」

「俺の名前を呼びつけなのはこの際スルーして……俺は嫌だぞ」

そういうと七海はその可愛い顔をしかめっ面にして

「仕方ないわね……じゃあお金あげるからさ」

「金には興味が無い」

「嘘ー！ あなた本当に人間？」

「俺は無欲な人間だからな」

「この後も頻繁にデートしたりするから……あつ今日私赤音の家に
行くからね」

何という自分勝手な人間なんだ……俺も反抗してやる！

「嫌です。拒否。やめてください。来ないでください。」

「……連れてってくれなかったら赤音が私に破廉恥な事したって学
校中に流す。」

そしたらどうなるかちっぽけな赤音の頭でも分かるわよね」

（昨日会ったばかりの奴に何が分かるんだよ……）

呆れて物も言えないとはこういう事を言うのだと俺はつくづく思う
のだった。

四話：対面と妹

そんな訳で何事も無く平穩に時間が進んで……行かずに

休み時間に廊下を歩いていると

朝でも無く特に話したことも無いいかにももてなさそうな男子に（俺もなのだが）

「おはよー！ 菊文字！」

語尾の方だけを大声で言っって背中をおもいつき叩いてくる。

そして去っていくというのをこれで六回目だろうか？

朝の出来事で俺は学校中に噂がとてつもなく広がってしまったらしい

（悪い意味で）

俺が、虹花に一つの文句を言っってもいいはずだ……言えねーけど。



そしてやったのことで放課後。たぶん俺の背中では紅蓮を越して青くなっているだろう。

この最それはとてつもなく猛烈においておこう。

今多くの観衆……いわゆる校庭にいる生徒達に俺は見られていた。

……虹花も加えて。それは別としよう。俺と虹花に行動に問題があるんだ。

腕を組んでるんだよ。ラブラブモード全開中なんだよ。それでもって明日が怖いんだよ。

俺が腕をどけようとするが間接を決められ動けない。

そして虹花は、俺の耳元に囁いた。

「これで私に告ろうとする馬鹿な男はいないでしょ」

そのかわり男達の怒りと憎しみと嫉妬の矛先が俺に直進するけどな。命の危険とともに。

しかし後でその馬鹿な男が出てくるのは別のお話。

校門から出てしばらく歩いてやっと俺は虹花から開放してもらえた。

「全く……ていうかお前そこまでして告白される事が嫌なのか？」

ある意味嬉しい事なんじゃ無いのか？」

「分かってないわね……理由は簡単めんどくさいからよ」

ある意味こいつらしい答えだな。

「——まああなたみたいな不細工犬にはそういう経験は無いで

しょうけどね」

・・・

「いやある……一度だけな」

「え？ あんたが告白されたの！？」

「まあそんなだけだな……あっ着いたぞここが俺の家だ」

俺の家は前に説明したとおりなんとも変哲も無い一軒屋だ。

俺と虹花が入るとまた倒れていたのは、妹だった。

「どうしたのこの子倒れてるわよ！」

まあ虹花から見たら妹なんて初めてだからな。前に説明しわすれたが、

冬音は十栗八苦……俺が家に帰ってきたときには倒れてる。

倒れてなかったら『今日俺いいことあるかも』と思ったりする位。

「で、冬音……今日はどうして倒れてんだ？」

「うう……お兄ちゃん……ホットケーキ焼こうとしたらね……爆発したの。」

それで煙が充満して……ガクッ」

そして妹は意識が無くなった。まあ生きてるから大丈夫でしょ

「という事で虹花……早く来い」

「……………あんたが命令すんな」

わぁ怖い怖い……美少女程こんな恐ろしいことってありますかね？

心の中の疑問にもちろん答えてくれる回答者など存在しないのだが。

五話…移住と写真

「ここが俺の部屋だ」

そう言っただけ虹花に案内させた部屋は俺の別になんとも変わらない部屋。

変わったところがあるとすれば、テレビやインターネットが置いてある事くらいだ。

「へえ男の部屋ってさ……こういう所に何か隠してあるもんじゃないの？」

そう言っただけ虹花は俺のベッドの下にその短い手を伸ばして探索している。

「ちなみに前が望んでいるものは無いぞ」

「普通あるでしょ？ エロ本くらい」

「……こいつはどんだけ男を野獣って思ってるんだよ……」

そして虹花は、ある物を指差してこういった。

「……ねえこれは何？」

・・・

彼女が指を指した物……それは俺とあいつが写る写真だった。

「それは……何でもないんだ」

「えー女の子と一緒に笑ってる写真だよー！ 背景が遊園地だから

……」

「それ以上言おうと俺も怒るから……誰にも知られたく無い過去はあるんだよ」

俺の顔はたぶん今憤怒の表情を浮かべているだろう。いかんいかん虹花も黙っちゃった。

「……ごめんごめん……気悪くしちゃったか？」

「別に良いわよ……」

完全にしかめっ面になってやがる……まあ仕方が無い。話を進め

るか。

「で、お前は何で俺の部屋に来たって言ったんだ？」

「それはあなたの家に移住させてもらうため」

は？　あまりにも淡々と虹花が言う為俺も対応に困る。

「えーとそれはどういう意味かな？」

「言葉通りの意味」

駄目だ……こいつが何を考えているか良く分からない……

六話：デジャブとクーデレ（前書き）

デジャブが復活（笑）

六話：デジャブとクーデレ

前にも説明したかも知らんが両親は今、なんちゃらんちゃらかで

がいこくに滞在中である。

ちなみになんちゃらんちゃらか良く意味が分からない？

それはだな……実は、俺も良く分からないんだよ。親

がどんな活動してんのかも。別に興味が無かったっていうのが、一番の

理由なんだが。

で、話を戻すが、必然的に親がいないので、（妹がいるが料理が壊滅的に下手）

俺が料理担当だ。

今はキッチンで、油をフライパンに通しているのだが……。

「あのなあ虹花。そんな目で見るなよ……集中出来ないんだが」

虹花は俺のする行動一つ一つに目を俺から離そうとはしない。

蛇に睨まれた蛙状態で全然料理に集中出来ん。

「良いでしょ。観察よ観察。それ位したって罰は当たらないでしょ」
まっいつか。冷蔵庫の中には何があるかなと。

うわっ……冷蔵庫が空だ。

そうだ。今日買い物に行こうとしたんだけどこいつ（虹花）のせいで、

いきそびれちゃった。

しゃーない。

「ちよっくら買い物に行って来るわ」

クーラーがきいたこの部屋から出るのは少々気が引けるが食糧難なんだ。

サッサと終わらせてくるか。俺は千円を無造作にポケットにしまい家の外へと飛び出した。

道路を歩いていると星が良く見える。ここから見えるのは、夏の
大三角。

人通りが多くなってくると、ちらほらとカップルが手を繋いで歩いているのが

目にはいる。

『来途君。星綺麗だね！』

俺の頭の中であいつの記憶が蘇る。

ここ歩いてつと嫌でも思いたしちまう。さっさと買い物を済ませるか。

やっぱ夏らしくそうめんに麦茶……そして俺の大好物のチョコミントの

アイスクリーム。

ちなみに最後のは、俺が買いたいからです。はい。俺は、来た道を帰っていると、

「おい！ お姉ちゃん、一緒に遊ばない」

「……」

「姉ちゃん、黙ってちゃ分からないよー」

あれ？　どっかで見なかったか？　この光景。

よし……ここは回り道を――――

「おっこの前の兄ちゃんじゃねーか」
使えませんでした。

「久しぶりだなー俺達運命の糸で引かれあってるのかもよ？」
そんな糸があったらこっちからはさみでチョッキンしてやる。こ
うなったら

「うおおおおおおお！」

俺は、狂気にも満ちた声で立ち向かって逝った。――――結果は、

惨敗です、俺地にひれ伏してます。

「……弱いですね」

背中までの髪が伸びていて、それでいて目は大きく虚ろ。

世間的に美少女と呼ばれる彼女は冷徹な言葉を俺に放った。

くううううう！　もっと……！　もっと……！　俺に力があれ
ば……！

俺は、女が絡まれている所に助け、強制フラグ（俺が半死状態に
陥る）でも

立つ体になってしまったのか？

「ま、まあ、とりあえず今度からはこうなるんじゃないぞ」

「……ボロボロの癖に」

ひ、ひでえ。仮にも助けてあげたのに。こんなときは、「ありがとうございます！」

是非お礼でも」では無いのだろうか？

「じゃ、じゃあ俺帰るわ」

「はい」

六話：デジャブとクーデレ（後書き）

中途半端な終わり方ですがユルシテクダサイ。

7話：居候が二人へと（前書き）

凄く更新が遅れてしまったけど更新です！

7話：居候が二人へと

「なんですかあ……この展開はー？」

取り敢えず俺は理解不能、且意味不明の今の状況にツツコミを入れてみた。

誰かー説明を要求する。……アイ アム ノウ プリーズ。

……と俺が言った所でだーれも答えてくれる訳が無いので俺が説明しよう。

分かりやすく行くぞ。

帰宅。⇒冬音と虹花がお出迎え。⇒さっきの少女が着いてくる。

⇒虹花『あー七海じゃない。あんたここで何してんの？』⇒俺困惑。

……という訳だ。

只今、リビング。俺、冬音。虹花。先程の少女がいる。

本題。

「で、虹花。俺に状況説明の義務がある筈じゃないのか？」

「えーと、この子は私の妹で……」

「はいストップ。そこおかしいですよー!？」

敬語になりながらも虹花の台詞中に制止の声をあげた。

「――何故、お前の妹がいるんだよ!？」

「……お姉ちゃん。逢いたかった」

そう甘えたように言い、虹花に抱き付く少女。おいおい、マジかよ。

「あー説明するわね。この子は私の妹の七海^{ななみ}。コイツ（俺）の体臭から僅かに発せられる私の甘美な匂いを嗅ぎ付けてきたのね……偉いわよ、七海。さすが私の妹」

感極まったのか、七海とか言う子の頬を撫でる虹花。

「私は冬音って言うんだよ。よろしくね！ 七海ちゃん」

「……よろしく」

……能天気なわが妹は今の状況を全く把握出来ていないようだった。

いや、ちょっと待て。

「まさか……だけだよ。虹花。この七海ちゃんも居候とか言うんじゃないねえだろうな？」

「ま、七海も居候ということでOK？」

「……私をちゃん付けしないでください。キモいです」
軽く言う虹花と侮蔑する態度で俺を罵る七海。

母さん、父さん。僕は一体どうすればいいのでしょうか。
教えてください。そして一言言わせてください神様。

もう嫌だよ。ヘルプミー。

「わー。家族が増えたよ、お兄ちゃん。賑やかになるねー！」
後この妹を賢くしてください。

7話：居候が二人へと（後書き）

果たして次の更新はいつになるのやらW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0543m/>

虹色の架け橋

2010年11月17日02時57分発行